接続部における名詞句節の脱範疇化について

青木 博史（九州大学／国立国語研究所）

1. 格助詞から接続助詞へ

（1）a. 女二人**ありける**が，姉は人の妻にてありける。（宇治拾遺物語・巻 3－15）

b. 父はこと人にあはせむと**いひける**を，母なんあてなる人に心つけたりける。（伊勢物語・10 段）

c. 山の端にいさよふ月を出でむかと待ちつつ**居る**に夜そ更けにける（万葉集・巻 7・1071）

（2）a. 年五十許ナル男ノ**怖シ気ナル**ガ，水干装束シテ打出ノ太刀帯ビタリ。（今昔物語集・巻 26－18）

b. 明日香川下**濁れる**を知らずして背ななと二人さ寝て悔しも（万葉集・巻 14・3544）

c. 旅にして**もの恋しき**に山下の赤のそほ舟沖に漕ぐ見ゆ（万葉集・巻 3・270）

● 名詞句節［ 述語連体形］ニ／ヲ／ガ［ 述語］

→ 副詞句節［ 述語連体形］ニ／ヲ／ガ［ 述語］

○ 『日本語文法大辞典』「に」（糸井通浩）

活用語の連体形に付いた例の中で，「秋風か今か今かと紐解きてうら待ちをるに月かたぶきぬ」（万 4335）のような例は，「うら待ちをる」という期待は「月かたぶきぬ」で裏切られたことになり，逆接の関係が認識でき，その関係を「に」が表していたとすると，この「に」は接続助詞という解釈が成り立つことになる。しかし，「うら待ちをる」から「月かたぶきぬ」への続きを時間の経過と考え，更に，連体形には名詞と同等の働きがあると考えるならば，この「に」は格助詞ということになる。〈中略〉このように奈良時代までに関しては，接続助詞として使われたかどうかの判定はできない。

○ 天野みどり（2011）「接続助詞的なヲ」

古代語の接続助詞のヲの用法とされるものに格助詞性があり，現代語の「格助詞ヲの周辺的用法としての接続助詞的なヲ」と変わらないという見方も可能である。

日本語の歴史上，一度も接続助詞のヲが確立したことはなかったという可能性がある。

● 古代語の連体形の機能＝名詞句節を構成する

準体節

補足節：雨などの**降る**さへをかし（枕），菊の花の**うつろひたる**を折りて（伊勢 18）

連体ナリ：はやても龍の**吹かする**なり（竹取）

擬喚述法：夏草の露分け衣着けなくに我が衣手の乾る時も**なき**（万 1994）

連体節：**うつくしき**事かぎりなし（竹取），童べの**踏みあけたる**築地（伊勢 5）

主節（「ぞ」「なむ」「や」「か」の結）：ふる里は花ぞ昔の香に**にほひける**（古今 42）

○ 時枝誠記（1954）体言格相当に付いたもの

（３）a. 「に」＝指定の助動詞の連用形

御志ひとつの**浅からぬ**に，よろづの罪許さるるなめりかし。（源氏物語・夕顔）

b. 「を」＝格助詞

若君のいとおぼつかなく，露けき中に過ぐし給ふも，心苦しう**思さるる**を，とく参り給へ。（源氏物語・桐壺）

○ 近藤泰弘（2000）接続助詞「を」の認定条件

（４）a. 「を」を承ける述語がまったくない

行きとぶらひけるを，む月の十日ばかりのほどに，ほかにかくれにけり。

（伊勢物語・4 段）

b. 「を」のあとの文に，「を」の承けるものとは異なる目的語がある

蛍のとびありきけるを「かれとらへて」と，このわらはにのたまはせければ，

（大和物語・40 段）

c. 「を」の承ける句中に「は」を含む

枇杷の大臣は，えなりたまはでありわたりけるを，つゐに大臣になりたまひにけるおほむよろこびに，太政大臣梅を折りてかざして，（大和物語・120 段）

○ 竹内史郎（2007）ホドニの構造変化

（５）a. 助詞ハが含まれる

渡りたまはむことは，とかう思したばかるほどに日ごろ経ぬ。

（源氏物語・松風）

b. テンスやモダリティを表す要素が現れる

さらば，かくし思しまどへる御心地も，限りあることにて，すこししづまらせたまひなむほどに，聞こえさせ承らむ。（源氏物語・夕霧）

c. 丁寧語が現れる

亡くなりはべりしほどにこそはべりしか。それも女にてぞ。（源氏物語・若紫）

（6）a.　むすめの尼君は，上達部の北の方にてありけるが，その人亡くなりたまひて後，むすめただ一人をいみじくかしづきて，　（源氏物語・手習）

b.　かく忌々しき身の添ひたてまつらむも，いと人聞き憂かるべし。　（源氏物語・桐壺）

c.　かの按察隠れて後，世を背きてはべるが，このごろわづらふ事はべるにより，かく京にもまかでねば，　（源氏物語・若紫）

2.　「が」の場合

○ 石垣（1955）「格助詞「が」から接続助詞「が」へ」

第 1 類：後件は形式上文を形成していながら，なお前件に対して述部的性質が濃厚で，後件の主体がきわめて提示語に近いもの。

第 2 類：前件の主体と後件の主体が同一なもの。

第 3 類：前件の客体と後件の主体が同一なもの。

第 4 類：前件の主体と後件の客体が同一なもの。

第 5 類：前後件の間に何ら形式上の連関がなく，両件は互いに対等で，後件は前件に対してきわめて唐突に現れるもの。

第 6 類：前後件の間に逆戻的の意味が見られるもの。

（7）a.　落入ケル時巳ノ時許**ナリケル**ガ，日モ漸ク暮ヌ。　（今昔物語集・16）

b.　女糸喜シト云テ**行ケル**ガ，恠ク此ノ女ノ気怖シキ様ニ思エケレドモ，　（今昔物語集・27）

c.　殊ニ勝レテ賢カリケル狗ヲ年来飼付テ**有ケル**ガ，此ノ狗一ツ俄ニ起走テ，　（今昔物語集・29）

d.　おなじ四年四月廿九日未時ばかりにつじ風吹たりけり，九条のかたより**おこりける**が，京中の家或はまろび或は柱ばかりのこれり。　（古今著聞集・17）

e.　目出たくは書て**候ける**が，難少々候。　（古今著聞集・11）

● 準体節

名詞節：〈コト〉タイプ＝作用性名詞句（述定）＝「外の関係」

関係節：〈ヒト・モノ〉タイプ＝形状性名詞句（装定）＝「内の関係」

● 連体形終止の一般化

（8）a.　カシコナル女ノ頭ニケダモノヽアブラヲヌリテ**ヲル**。　（三宝絵・中）

b.　心ニ慈悲有テ身ノ才人ニ**勝タリケル**。　（今昔物語集・巻 19－2）

3.　「に」の場合

○ 山口堯二（1980）

格助詞を前提とする接続助詞の成立は，本来両者が**意味**のとりようによって同時に転換しうる両立性に基づくことであり，古代語における「に」には，両者の有機的な両立性が，多くの場合に認められる。したがって，「連体形＋に」形式の先行成分は，意味上具体的な事態に対応していると見うる限り，（「…ときに」と訳せる表現でも）接続助詞としての条件を満たしていると考えてよい。

（9）a.　如是仕へ奉り侍るに，去年の十一月に，威きかも我が王，朕が子天皇の詔はく
（続日本紀・慶雲四年七月十七日）

b.　つぎねふ山背道を人夫の馬より行くに己夫し徒歩より行けば見るごとに音のみし泣かゆ　（万葉集・巻 13・3314）

○ 格助詞「に」：

場所・時間，動作の対象，動作の目的，変化の結果，原因・理由，受身・使役の対象，比較の基準，添加・列挙，資格・状態，…

（10）a.　この君の生まれ給ひし**とき**に，契り深く思ひ知りにしかど，（源氏物語・若菜）

b.　日しきりにとかくしつつののしる**うち**に，夜ふけぬ。（土佐日記・12 月 21 日）

c.　むかし，男，あひがたき女にあひて物がたりなどする**ほど**に，鳥の鳴きければ，
（伊勢物語・53 段）

● 名詞句［　述語連体形＋形式名詞］ニ［　述語］

→ 副詞句［　述語連体形＋φ］ニ［　述語］

（11）a.　少し秋風吹き立ちなむとき，かならずあはむ。　（伊勢物語・96 段）

b.　つらつき，まみなどはいとよう似たりしゆゑ，かよひて見えたまふも似げなからずなむ。　（源氏物語・桐壺）

○ 小田勝（2006）「連体形接続法」→青木（2008）

（12）a.　内裏にもさる御心まうけどもある，つれなくてたちぬ。　（源氏物語・紅葉賀）

b.　朝顔を引き寄せ給へる，露いたくこぼる。　（源氏物語・宿木）

● 名詞句［　述語連体形＋形式名詞］φ［　述語］

→ 副詞句［　述語連体形＋φ］φ［　述語］

● 名詞句［　述語連体形＋φ］φ［　述語終止形］。

(13)《中古》［また畳紙の手習いなどしたる］φ 御几帳のもとに落ちたりけり。

↓　　↓　　（源氏物語・手習）

《中世》［見も知らぬ花の色いみじき］が 咲きみだれたり。（宇治拾遺物語・13）

4.　「を」の場合

○ 天野みどり（2011）

(14) a.　直接の述語動詞とは結びつかなくても，さらにその後に続く述語動詞と関係する場合（＝4b）

b.　言語的に顕在化していなくても，意味的に動詞述語が《補充》され，それと関係する場合（「車なりし人はおほかりしを誰にある文にか（大和 103)」）

c.　言語的に顕在化している動詞述語句が，意味的に他動詞相当句として《変容》解釈され，それと関係する場合（＝4a）

(15) a.　五節過ぎぬと思ふ内裏わたりのけはひ，うちつけにさうざうしきを，巳の日の夜の調楽は，げにおかしかりけり。　（紫式部日記：天野 2011）

b.　さぶらふ人々の泣きまどひ，上も御涙のひまなく流れおはしますを，あやしと見奉り給へるを，よろしきことだに，かかる別れの悲しからぬはなきわざなるを，まして哀れにいふかひなし。　（源氏物語・桐壺：京極 1987）

○ 近藤泰弘（2000）

a.　格助詞：文脈から考えて，対応する述語用言があり，目的語となっている体言をうけていると考えられる「を」

b.　間投助詞：広義の連用に続く「を」

c.　終助詞：対応する述語用言が存在せず，単独で体言・連体形等をうけている「を」

○ 金水敏（1993）

「ヲ」は，項と述語の結合を明示すると同時に，それを含む節の意味的特徴として機能する。その意味的特徴とは，視点が存する事態１(主節)に対し，視点者によって選ばれ結び付けられた原因や祈念された仮想的事態などを示す，事態２(従属節)の標識である。

(16) a.　世の中を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば（万 893）

b.　［皆人を寝よ］との鐘は打つなれど君をし思へば寝ねかてぬかも（万 607）

事態２　　事態１

5.　古代語から近代語への変化

● 古代語：述語（意味・形態）重視の言語

・節と節の「意味」で関係を表示

⇒助詞φで格（主格，対格，斜格），接続など，あらゆる関係が表示可能

助詞を表示した場合も，用法は多様（＝節同士の意味関係に依存）

・述語の形態で文中 or 文末，意味の分化を表示

⇒連体形は文中（名詞句を形成），終止形は文末

未然バー已然バの対立，未然形・連用形・終止形による叙法形式

● 近代語：機能語重視の言語

・助詞で関係を表示 ⇒格助詞（主格ガ，対格ヲ），接続助詞

・節を形成する述語の形態はほぼ固定（古典語の「連体形」）

⇒接続：連体形＋ナラ／ガ／ケレドモ／シ／ホドニ／ニヨッテ／ノデ……

述部：連体形＋ダロウ／カモシレナイ／ニチガイナイ／ハズダ……

準体節（＝名詞句）：連体形＋ノ

6.　「ので」「のに」の成立

● 代名詞→関係節（モノ・ヒト）→名詞節（コト）

（17）a.　人妻と我が**の**とふたつ思ふには馴れにし袖ぞあはれなりける　（好忠集・457）

b.　せんどそちへ**わたひたの**は何としたぞ。　（虎明本狂言・雁盗人）

c.　姫が肌に，父が杖をあてて**探すの**こそ悲しけれ。　（貴船の本地）

d.　まづ物を食して吐すものを膈と**いふ**は，俗物も当推量にいふテナ。

（浮世風呂 1809-13・上）

・ガ格・ヲ格→ニ格（「するに及ばない」「するに限る」「するにつれて」）

・江戸後期に至っても，名詞節における「ノ」標示は義務的でない（＝16d）

●「名詞節（準体節）＋なり」→「名詞節（ノ節）＋だ」

（18）a.　はやても龍の**吹かする**なり。　（竹取物語）

b.　熟睡ナラネバ分明ニハ**ヲボヘヌ**也。　（中華若木詩抄・上・5 オ）

c.　江戸ツ子の金をおまへがたがむしり**取て行の**だ。　（浮世床 1813・初中）

d.　学生が一生懸命勉強している。試験 が／*の ある**のだ**。　（角田 1996 より）

・「連体形＋の＋だ」は「名詞句＋だ」ではない（＝17d）（角田 1996，野田 1997）

名詞節［　述語連体形］ナリ ➡ 名詞節［　述語連体形＋ノ］ダ
→ 主節［［　述語連体形］ノダ］

● 準体節［　述語連体形］ガ［　述語］ ➡ 準体節［　述語連体形＋ノ］ガ［　述語］
↓　↓
副詞節［　述語連体形］ガ［　述語］ ➡ 副詞節［　述語連体形］ガ［　述語］

● 準体節［　述語連体形］ヲ［　述語］ ➡ 準体節［　述語連体形＋ノ］ヲ［　述語］
↓　↓　↓　↓
副詞節［　述語連体形］ヲ［　述語］ ➡ ×　↓　↓
副詞節［　述語連体形］ノヲ［　述語］？

(19) a.　もとは雑貨をおもにあつかっていたのを，生糸製品一本で行こうという方針で，これも貿易再開をねらって準備中の生産者側と打ち合わせをすすめていた。
（石川淳「処女懐胎」1948）

b.　夏休みに当然帰るべきところを，わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。
（夏目漱石「こころ」1914）

c.　さらにかやうのすきずきしきわざ，ゆめにせぬものを，わが家におはしましたりとて，むげに心にまかするなめり，と思ふもいとをかし　（枕草子・8段）

● 準体節［　述語連体形］デ［　述語］ ➡ 準体節［　述語連体形＋ノ］デ［　述語］ ➡ ×
↓　↓　↓　↓
副詞節［　述語連体形］デ［　述語］ ➡　副詞節［　述語連体形］ノデ［　述語］

(20) a.　Do に終る動詞状名詞は奪格の助辞 Ni（に），Yori（より），De（で），Nitcuite（に就いて），Vo motte（を以て）をとる。例へば，Monono fonuo caquyori tocuuo totta.（物の本を書くより得をとった。）Ex scribendo（書くことの故に）。Fumiuo caquni cutabireta.（文を書くに草臥れた。）In scribendo（書くことで）。Monouo mŏsude cutabireta.（物を申すでくたびれた。）Com falar（話す事により），falando（話すので）。　（土井訳ロドリゲス日本大文典・p.392）

b.　おふくろが切ツて廻すでのびるげな　（誹風柳多留 1764・3篇 16 ウ）

c.　エヽこんな事何やかや言ひたいけれど，人が見るので何ンにも言れぬ。
（新版歌祭文 1780）

d.　そして手めへは介市がほうへいきてへといふので，そんなうれしがるのか。
（比翼紫 1801・5回）

● 準体節［　述語連体形］ニ［　述語］ ➡ 準体節［　述語連体形＋ノ］ニ［　述語］

↓　↓　　↓　↓

副詞節［　述語連体形］ニ［　述語］　副詞節［　述語連体形］ノニ［　述語］

↘ 副詞節的［　述語連体形］ニ［　述語］

（21）a.　いとかくしもあらじと**思ふ**に，真実に絶えいりにければ，　（伊勢物語・40 段）

b.　わが恋はしらぬ山路に**あらなく**に迷ふ心ぞわびしかりける　（古今集・597）

c.　マダ見タラヌノニ月ノカクレルソノ山ノフモトデ見テ居レバ

（古今集遠鏡 1793・雑上・883）

（22）a.　其ナラバ山路ノ艱難ヲ祈ル程ニ**云**デアラウゾ。　（毛詩抄・巻 2・39 オ）

b.　わつちが往ても喧嘩ばかりして居るだろう。　（粋町甲閨 1779）

c.　今日の形りは拵がおつりきだから，先でもぶ気味に思つてじろじろ**見る**のだろう。　（花暦八笑人 1820−34・初下）

● ダロウ：準体節［　述語連体形］デアラウ ➡ 主節［［　述語連体形］ダロウ］

ノダロウ：準体節［　述語連体形］デアラウ ➡ 準体節［　述語連体形＋ノ］ダロウ

➡ 主節［［　述語連体形］ノダロウ］

参考文献

天野みどり（2011）『日本語構文の意味と類推拡張』笠間書院

石垣謙二（1955）『助詞の歴史的研究』岩波書店

小田勝（2006）『古代語構文の研究』おうふう

京極興一（1987）「接続助詞「に」「を」「が」の成立と展開」『国文法講座 3』明治書院

金水敏（1993）「古典語の「ヲ」について」『日本語の格をめぐって』くろしお出版

近藤泰弘（2000）『日本語記述文法の理論』ひつじ書房

竹内史郎（2007）「節の構造変化による接続助詞の形成」『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房

角田太作（1996）「体言締め文」『日本語文法の諸問題』ひつじ書房

野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』くろしお出版

原口裕（1971）「「ノデ」の定着」『国文研究（静岡女子大学）』4

宮内佐夜香（2003）「江戸後期から明治初期における接続助詞ニ・ノニの消長」『日本語研究』23

山口堯二（1980）『古代接続法の研究』明治書院

山口堯二（1996）『日本語接続法史論』和泉書院

吉田永弘（2000）「ホドニ小史―原因理由を表す用法の成立―」『国語学』51-3

青木博史（2005）「複文における名詞節の歴史」『日本語の研究』1-3

青木博史（2007）「近代語における述部の構造変化と文法化」『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房

青木博史（2008）「書評　小田勝著『古代語構文の研究』」『日本語の研究』4-3

青木博史（2011）「述部における名詞節の構造と変化」『日本語文法の歴史と変化』くろしお出版